

詩篇140－144篇 「戦う祈り」

1A 悪意という毒 140

1B まむしの毒のような言葉 1－5

2B 敵に対する炭火 6－13

2A 主に守られる口 141

1B 祈りによる献身 1－5

2B 敵の没落 6－10

3A 洞窟からの救い 142

1B 御前での嘆き 1－3

2B 主こそ受ける分 4－7

4A 衰え果てた霊の中での祈り 143

1B 主を慕う心 1－6

2B 恵みによる力づけ 7－12

5A 共に戦われる神 144

1B 人のはかなさ 1－4

2B 神ご自身の介入 5－11

3B 民の祝福 12－15

本文

詩篇 140 篇から読んでいきます。私たちは詩篇全体のクライマックスになっている、ダビデの詩篇を読んでいきます。そして来週、最後に「ハレルヤ詩篇」を見ていきます。今日読んでいくところには、「戦う祈り」がたくさんあります。ダビデは戦う人でした。サウルからの救い、そして周囲の外国人の敵からの救い、それから後に息子アブシャロムからの救いもあります。私たちが日頃の生活で祈りの中で戦うことを読み取っていきたいと思います。

1A 悪意という毒 140

1B まむしの毒のような言葉 1－5

140 指揮者のために。ダビデの賛歌 140:1 主よ。私をよこしまな人から助け出し、暴虐の者から、私を守ってください。140:2 彼らは心の中で悪をたくらみ、日ごとに戦いを仕掛けています。140:3 蛇のように、その舌を鋭くし、そのくちびるの下には、まむしの毒があります。セラ 140:4 主よ。私を悪者の手から守り、暴虐の者から、私を守ってください。彼らは私の足を押し倒そうとたくらんでいます。140:5 高ぶる者は、私にわなと綱を仕掛け、道ばたに綱を広げ、私に落とし穴を設けました。セラ

これは、おそらくダビデがサウルから逃げている時に歌われたものです。サウルがダビデを殺そ

うとしていたのですが、サウル自身はダビデが謀反を企てて、サウルを打ち倒すという恐れを持っていました。もちろん、被害妄想です。けれども、そこでサウルに耳打ちをした者たちがいたので、サウルがそれを信じたという面もあります。ここに書かれている、「まむしの毒」です。その言葉の畏によってダビデの魂を潰してしまおうとする魂胆です。

ダビデの詩篇を読むと、彼の祈りの中での戦いは、物理的な反対以上に言葉による攻撃が多いです。私たちは言葉に対して、注意深くならないといけません。大事なのは、「あることを語るべきか、どうか。」というよりも、心の状態がどうなっているかです。イエス様が、言われた通りですね。「マルコ 7:21-23 内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。」ダビデの他の詩篇では、言葉でどれほど滑らかにしても、それが人の魂にのこぎりを入れるような傷も与えることも話しています。心が主と共にある人は、そこから出てくる言葉がどのような表現形態であっても、そこには愛があります。心が主から離れている人は、どのような言葉を使っていたとしても、人を引き落とします。

ここにある「まむしの毒」の箇所ですが、ローマ 3章 13節で引用されています。そこはパウロが、「義人はいない。ひとりもない。」と言っている言葉の次に出てくるもので、つまり、全ての人がこのような、まむしの毒を持つ舌を持っているという適用としているのです。そこで、ここを誰か他の人のことではなくて、自分自身に当てはめると、私は「なるほど、そのとおりだ！」と納得してしまいました。自分が自然にしていたら、この心から出てくるものは、結局は人を痛めつける毒のある言葉なのだということです。このことが分かると、次に出てくる悪者に対する神の裁きはまさに、自分が受けなければいけないものであり、そのような私がキリストの流された血潮によって贖い出されて、聖なる御霊によって清められており、自分ではなく徹底的に御霊に拠り頼むという不断の努力によってのみ、神の愛によって人々を建て上げていけることを知るのです。

2B 敵に対する炭火 6-13

140:6 私は主に申し上げます。「あなたは私の神。主よ。私の願いの声を聞いてください。140:7 私の主、神、わが救いの力よ。あなたは私が武器をとる日に、私の頭をおおわれました。

主ご自身が、今、ダビデに救いの兜をかぶせてくださっています。頭を覆われました、というのは、兜をかぶらせてくださったということです。彼の思いが、主の防御によって守られることを祈っています。キリスト者に対しても、主は同じことをしておられます。「1テサロニケ 5:8 しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの望みをかぶるとしてかぶって、慎み深くしましょう。」私たちの思い、ここが御霊の支配を受けるのか、それとも悪霊からの声を聞いてしまうのか、その戦場になっています。「ローマ 8:6 肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。」

140:8 主よ。悪者の願いをかなえさせないでください。そのたくらみを遂げさせないでください。彼らは高ぶっています。セラ

前回、私たちは、「主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます。(138:8)」という恵みを見ました。そして霊の戦いにおいては、敵が自分たちの企みを遂げさせようとする力が働いています。その願いをかなえさせないでください、という祈りです。

140:9 私を取り囲んでいる者の頭。これを彼のくちびるの害毒がおおいますように。140:10 燃えている炭火が彼らの上にふりかかりますように。彼らが火の中に、また、深い淵に落とされ、彼らが立ち上がれないようにしてください。140:11 そしる者が地上で栄えないように。わざわいが暴虐の者を急いで捕えるようにしてください。」

悪を計る者には、その悪によって報いが来るようにという祈りです。人間は、自分自身を救うために他者を押しつけて、それで悪を行ないます。しかし、悪を行なえばその中にいるので、自分自身も悪を被るのです。それはちょうど、神の愛の反対です。神の愛は、その中にいれば自分が神に愛され、そして自分も神を愛して、隣人を愛します。そして兄弟たちも自分を愛します。自分も愛しますが、他者からも愛される。なぜなら、神の愛がそこを支配しているからです。

そして、ここで「炭火がふりかかるように」と祈っていますが、これもローマ人への手紙で使徒パウロが引用しています。「ローマ 12:20 もしあなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。渴いたなら、飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです。」悪に対して善で報いなさいという勧めの中で語っています。つまり、復讐は神に任せる態度です。そして悪を行なっている者に反応するのではなく、キリスト者としてしなければいけない善の行いをしなさいと言っています。ちょうどそれは、たとえテロリストであっても、負傷したら治療する医者のように、分け隔てない愛に基づいているのです。悪については主が判断してくださいます。

140:12 私は知っています。主は悩む者の訴えを支持し、貧しい者に、さばきを行なわれることを。
140:13 まことに、正しい者はあなたの御名に感謝し、直ぐな人はあなたの御前に住むでしょう。

神を愛して、人を愛するという命令にしたがうと、この世においては悩む者、貧しい者にされていきます。自分を不利にさせていきます。しかし、そのような弱き者たちに主は、必ず報いてくださるという約束です。

そして今回の学びで大事なものは、最後の目的です。なぜ敵からの救いを祈っているのでしょうか。「あなたの御名に感謝して、御前に住むため」であるとあります。自分が苦境から救われることが目的ではありません。自分が御名に感謝して、御前に住むために、自分中心ではなく、神中心に生きていく力が与えられるために救いを求めているのです。

2A 主に守られる口 141

141 篇は、今度はこうした悪者の口の中に自分自身が入っていかないようにという祈りです。

1B 祈りによる献身 1-5

141 ダビデの賛歌 141:1 主よ。私はあなたを呼び求めます。私のところに急いでください。私があなたに呼ばれるとき、私の声を聞いてください。141:2 私の祈りが、御前への香として、私が手を上げることが、夕べのささげ物として立ち上りますように。

ダビデは、霊の戦いにおいてその基礎となっていたのは祈りでした。ここで彼は祈りを、まるで主の幕屋において祭司が奉仕をしているように、主のご臨在を信じて行なっています。彼は逃亡の身なのでそこに行くことはできないのですが、その限界の中でも主を礼拝しました。「御前への香として」というのは、祭司が聖所において香壇で捧げる香がありますが、その煙が契約の箱、また贖いの蓋のところまで行くようにしています。それから、手を上げていますが、「夕べの捧げ物」としてほしいと言っていますが、朝ごとに、夕ごとに祭壇でいけにえを捧げることを主は命じておられました(出エジプト 29:39)。私たちも共に主を礼拝するこの時を、日頃の祈りの時にも、この主のご臨在を持ち込めるといいですね。

141:3 主よ。私の口に見張りを置き、私のくちびるの戸を守ってください。141:4 私の心を悪いことに向けさせず、不法を行なう者どもとともに、悪い行ないに携わらないようにしてください。私が彼らのうまい物を食べないようにしてください。

ダビデの内なる格闘は、自分がされてきた毒のある言葉、これを自分自身が受け入れて、楽しむことのないように、ということであります。私たちは悪に染まる方法は、復讐することですね。しばしば言われることは、復讐をすれば自分が被ったその悪いことを自分自身もすることになる、ということです。ですから悪に対しては善によって対応しなければ、本当に意味でその悪を憎んでいることになりません。自分に対する悪を忌み嫌っているうちに、自分自身がその悪を行なうことのないように祈っています。それを、「うまい物」を形容しています。罪を行なうことはおいしいです。言葉による罪も同じです。「箴言 18:8 陰口をたたく者のことばは、おいしい食べ物のような。腹の奥に下っていく。」

141:5 正しい者が愛情をもって私を打ち、私を責めますように。それは頭にそそがれる油です。私の頭がそれを拒まないようにしてください。彼らが悪行を重ねても、なおも私は祈ります。

そこで私たちは、陰口を好むような肉による楽しさに対して、真の喜びであり楽しさを知る必要があります。それは、愛による叱責です。ここでも祭司が受ける油注ぎに言及していますね。聖別される時に油を注がれますが、愛をもって叱責を受けることを、自分を聖めることとして尊んでいます。叱責を皆さんはどれだけ心で喜んでいるでしょうか。気持ちとしては痛いし、悲しいですが、霊

は喜んでいるはずで、主は、愛する者を懲らしめますし、兄弟が愛をもって語る言葉は自分を生かすこと、殺すことはありません。「箴言 27:5-6 あからさまに責めるのは、ひそかに愛するのにまさる。憎む者がくちづけしてもてなすよりは、愛する者が傷つけるほうが真実である。」

2B 敵の没落 6-10

141:6 彼らのさばきづかさらが岩のかたわらに投げ落とされたとき、彼らは私のいかにも喜ばしいことばを聞くことでしょう。141:7 人が地を掘り起こして砕くときのように、私たちの骨はよみの入口にまき散らされました。

これは、ちょっと難しい文です。7 節の言葉は鍵括弧を付けた方が分かると思います。悪者たちの指導者らが、岩に投げ落とされます。(ところで、今、イスラム国は同性愛者を高所から投げ落として殺しますが、それは昔の死刑方法を採用しているからです。)そして 7 節で、自分たちの骨が陰府にまき散らされていると話しています。つまり、ここで言いたいのは、悪者は神の正義の中で公正に裁かれるということです。

141:8 私の主、神よ。まことに、私の目はあなたに向いています。私はあなたに身を避けます。私を放り出さないでください。141:9 どうか、彼らが私に仕掛けたわなから、不法を行なう者の落とし穴から、私を守ってください。141:10 私が通り過ぎるそのときに、悪者はおのれ自身の網に落ち込みますように。

ダビデは、自分自身が悪者の罠に陥らないように祈っています。同時に、彼らがその穴に落ちるように願っています。自分自身は悪に加担しない。しかし悪者はその悪の中で滅ぼされます。

3A 洞窟からの救い 142

そして、142 篇は敵に追われて、自分はどこにも行くことができないという牢獄のような状態の中で祈ったものです。午前礼拝でここをすべて読みました。

1B 御前での嘆き 1-3

142 ダビデのマスクール。彼が洞窟にいたときに。祈り 142:1 私は主に向かい、声をあげて叫びます。声をあげ、主にあわれみを請います。142:2 私は御前に自分の嘆きを注ぎ出し、私の苦しみを御前に言い表わします。142:3 私の霊が私のうちで衰え果てたとき、あなたこそ、私の道を知っておられる方です。私が歩く、その道に、彼らは、私に、わなを仕掛けているのです。

ダビデの優れた霊性はここに表れています。声に上げて神に叫んでも、それで逃れの道が開かれたわけではありません。それで自分の霊がうなだれています。けれども、それでもなおのこと、主ご自身が自分の道を知っているとされます。私たちは窮地に立たされると、必ず打開策として何かをしようとします。けれども、それがむしろ敵の仕掛けている罠なのです。どんなに自分の

気持ちや理解では、行動に移さなければいけないと言っている、主こそが自分の道を知っていると決め込みます。

2B 主こそ受ける分 4-7

142:4 私の右のほうに目を注いで、見てください。私を顧みる者もなく、私の逃げる所もなくなり、私のたましいに気を配る者もいません。142:5 主よ。私はあなたに叫んで、言いました。「あなたは私の避け所、生ける者の地で、私の分の土地です。」

自分の行動範囲が狭められていても、主ご自身が共におられるという確信は大きな土地を所有しているかのような、自由を与えてくれます。パウロは、「2テモテ 2:9 私は、福音のために、苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことは、つながれてはいません。」と言いました。牢獄にいますが、彼は御言葉を自由にその中で語っていました。彼の手紙の多くが獄中書簡と呼ばれており、牢獄から書かれているものです。そして、彼の福音宣教によって皇帝の親衛隊の者たちに信仰を持つ人々が起こされました。使徒の働き最後は、「28:31 大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。」とありますが、確かに家にいましたが、鎖につながれていた軟禁状態だったのです。しかし、福音を語ることにについては、大胆に、少しも妨げられなかったと言っています。こういった自由です。

142:6 私の叫びに耳を留めてください。私はひどく、おとしめられていますから。どうか、私を迫害する者から救い出してください。彼らは私よりも強いのです。142:7 私のたましいを、牢獄から連れ出し、私があなたの御名に感謝するようにしてください。正しい者たちが私の回りに集まることでしょう。あなたが私に良くしてくださるからです。」

ダビデは窮地から救われる時に、二つのことを願っています。一つは主に感謝することです。もう一つは、正しいものが自分の周りに集まることです。つまり、主をあがめ、かつ共に主をあがめる者たちが周りにいるように、という祈りなのです。もし深刻な病気にかかって、それが癒された後で、その人が主のことを考えずに、その自由となった体で自分の好きなことをするというのであれば、いかがでしょうか？そうではありませんね、私たちは、主に感謝している献身をしている人々の集まりです。そして、その恵みを分かち合う者たちの集まりです。一人一人が、主ご自身が自分の受ける分であるという経験を持っているからこそ、それぞれの場で主が共におられることを体験しているからこそ、ここでの交わりが主の恵みに満ちたものとなるのです。

4A 衰え果てた霊の中での祈り 143

143 篇は、おそらくはアブシャロムに追われている中でのダビデの祈りであると思われます。これまでの敵からの救いとの違いは、サウルに追われている時、ダビデはある意味、無垢でした。彼は罪を犯していないのに、サウルが一方的に被害妄想を膨らまして彼を追ったのです。しかし、アブシャロムの時は違います。ダビデはバテ・シェバと姦淫の罪、そして夫ウリヤを殺す罪を犯し

た後、彼の家の中で剣が離れないと預言者ナタンは告げましたが、そうになっていた中でアブシャロムから逃げたのです。アブシャロムに対して主にあつて戒めることをしなかった、愛情を注がなかったという落ち度はありますが、彼の反抗は、その遠因に自分の犯した罪があつたからです。ですから、彼の祈りは、自分の義に頼らず、神の眞実と義に拠り頼む、自分には良いものが全くないという前提で捧げているものです。

1B 主を慕う心 1-6

143 ダビデの賛歌 143:1 主よ。私の祈りを聞き、私の願いに耳を傾けてください。あなたの眞実と義によって、私に答えてください。143:2 あなたのしもべをさばきにかけてください。生ける者はだれひとり、あなたの前に義と認められないからです。

主が祈りを聞かれるのは、自分の眞実と義ではなく、主の眞実と義によるものです。主がいかに眞実な方か、この方がいかに正しいのか、それが現われるために主は祈りを聞いてくださいます。そして、ダビデは自分自身が罪人であることを思いつつ、敵から救われることを祈っています。140 篇から戦う祈りを見していますが、悪者の罪深さや悪者への裁きは、まさに自分自身に当てはまるという、深い罪の自覚が与えられているでしょうか。このことを、罪に責められることになくキリストの十字架の中で受け入れる時に、その人は本当に神の恵みの福音の中にとどまることができず。

143:3 敵は私のたましいを追いつめ、私のいのちを地に打ち砕き、長く死んでいる者のように、私を暗い所に住ませたからです。143:4 それゆえ、私の霊は私のうちで衰え果て、私の心は私のうちでこわばりました。

彼は祈っているのですが、ただその中で霊が衰え果てています。ある注解には、「今風に訳せば、「私の心は折れてしまった」だろう。」とありました。そうですね、しかしダビデはあきらめません。

143:5 私は昔の日々を思い出し、あなたのなされたすべてのことに思いを巡らし、あなたの御手のわざを静かに考えています。143:6 あなたに向かって、私は手を差し伸べ、私のたましいは、かわききった地のように、あなたを慕います。セラ

彼は心の限界が来ていたのに、それでもなおのこと神に期待をかけました。たった今、主の臨在を感じ取ることはできません。そんな状態ではありません。そこで彼は、昔の日々を思い出して、主の御手の業があつたのを思い出しています。ダビデは主に捕えられている、主から離れられない、臨在が感じられないのであれば、過去の臨在を思い出している。主のみが逃れの道なのです。

2B 恵みによる力づけ 7-12

143:7 主よ。早く私に答えてください。私の霊は滅びてしまいます。どうか、御顔を私に隠さないで

ください。私が穴に下る者と等しくならないため。143:8 朝にあなたの恵みを聞かせてください。私はあなたに信頼していますから。私に行くべき道を知らせてください。私のたましいはあなたを仰いでいますから。143:9 主よ。私を敵から救い出してください。私はあなたの中に、身を隠します。143:10 あなたのみこころを行なうことを教えてください。あなたこそ私の神であられますから。あなたのいつくしみ深い霊が、平らな地に私を導いてくださるように。143:11 主よ。あなたの御名のゆえに、私を生かし、あなたの義によって、私のたましいを苦しみから連れ出してください。

過去の臨在を思い出し、少し力づいたのでしょう。数々の祈りを捧げています。一つは、主の御顔です。主が御顔を向ければ、そこに恵みがあります。その顔は好意を持った顔だからです。次に、恵みの御言葉を朝に聞けるようにと言っています。主から朝に御言葉を聞けることは恵みです。そして次に、行くべき道を示してくださいと願っています。それから、敵からの救いです。さらに 10 節には、御心を行なうことができるように。御心は何かを知りたいと言う人たちはいますが、すでに知っている御心を行いたいと願う人は少ないです。それから、主の慈しみの霊が導かれるようにと祈っています。そして、主の御名によって、主の義によって救われるように、と祈っています。自分の義ではなく、神の義による救いです。

143:12 あなたの恵みによって、私の敵を滅ぼし、私のたましいに敵対するすべての者を消し去ってください。私はあなたのしもべですから。

再び、敵からの救いの目的が書かれています。自分が救われることだけを要求するならば、それは神が自分に仕えることでありますが、ダビデはその反対に自分がしもべであり、自分が神に仕えるために、敵から救われるように祈っています。これが真実な祈りであり、神に仕えさせるのではなく、自分が神に仕える態度を引き出すために祈るのです。

5A 共に戦われる神 144

そして次の詩篇は、敵からの救いですが、外国人からの救いです。ダビデがイスラエルの王として立てられ、周囲の敵を倒して、彼らを自分たちに服従させていくところの祈りです。

1B 人のはかなさ 1-4

144 ダビデによる 144:1 ほむべきかな。わが岩である主。主は、戦いのために私の手を、いくさのために私の指を、鍛えられる。144:2 主は私の恵み、私のとりで。私のやぐら、私を救う方。私の盾、私の身の避け所。私の民を私に服させる方。144:3 主よ。人とは何者なのでしょう。あなたがこれを知っておられるとは。人の子とは何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。144:4 人はただ息に似て、その日々は過ぎ去る影のようです。

ダビデが戦う時に、その根底にある人間観はここにあります。「人はただ息に似て、その日々は過ぎ去る影のよう」というものです。人間がいかに無能で、無力であるか、これを知っているからこ

そ、力ある働きをすることができます。なぜなら、その人は神に拠り頼むのであり、自分自身はあてにならないからです。使徒パウロが取った、「私はキリストと共に十字架につけられている」という立場です。主の働きができるのは、飽くまでも、「主が私を顧みられている」という好意、恵みによるものだけだ、ということです。

2B 神ご自身の介入 5-10

144:5 主よ。あなたの天を押し曲げて降りて来てください。山々に触れて、煙を出させてください。
144:6 いなずまを放って、彼らを散らし、あなたの矢を放って、彼らをかき乱してください。144:7
いと高き所からあなたの御手を伸べ、大水から、また外国人の手から、私を解き放し、救い出してください。144:8 彼らの口はうそを言い、その右の手は偽りの右の手です。

人間にはできないからこそ、神がして下さいます。主が天から来てくださり、そしてシナイに降りてきて山々を動かされたように、その力をもって襲ってくる敵をかき乱してくださいと願っています。

144:9 神よ。あなたに、私は新しい歌を歌い、十弦の琴をもってあなたに、ほめ歌を歌います。
144:10 神は王たちに救いを与え、神のしもべダビデを、悪の剣から解き放されます。144:11 私を、外国人の手から解き放し、救い出してください。彼らの口はうそを言い、その右の手は偽りの右の手です。

主に戦いつつ、ほめ歌を歌っています。ここで大事なのは、「賛美と戦いが同期になっている。」ということです。戦っていて、それで慰めを得るために主のところに来るのではなく、まさに戦いの中に主をお迎えして、そして戦いの一貫として主をほめたたえているということです。

ここに、「神と共に戦う」という信仰があります。私たちが世の戦いを戦って、そしてここに来て慰めを得るというのは、良いことかもしれませんが、しかし、それでは不十分で、慰めを得て、主の力によって世において戦うことです。慰めを得るだけに教会に来るのではなく、教会から遣わされて、その世のど真ん中にて主によって、新しい祝福の道を切り開くという積極性があるのです。これまで自分がしてこなかったこと、新しい方法、新しい考え、新しい知恵があるかもしれません。御言葉は、おみくじのようにその時の気持ちを和ませるものではなく、人を変える新たな力です。

そこに必要なのは「御言葉の実践」であります。「ヤコブ 1:23-25 みことばを聞いても行なわない人がいるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で見る人のようです。自分をながめてから立ち去ると、すぐにそれがどのようなであったかを忘れてしまいます。ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行ないによって祝福されます。」鏡というのは、家の中で見るものです。けれども、この頃、模範にすべき人々がいますね。そう、女性たちです。電車の中でも周囲に臆せず、身だしなみを確かめるため手持ちの鏡で確かめます。これはすばらしい、霊的な模

範です。御言葉について、私的空間である教会と、公的空間である世の中を分けてはいけません。教会において御言葉を聞くのですが、世においてそれをそのまま携えていかねばならないのです。世において、果敢に御言葉を用いていきます。

3B 民の祝福 11-15

144:12 私たちの息子らが、若いときに、よく育った若木のようになりますように。私たちの娘らが、宮殿の建物にふさわしく刻まれた隅の柱のようになりますように。144:13 私たちの倉は満ち、あらゆる産物を備えますように。私たちの羊の群れは、私たちの野原で、幾千幾万となりますように。144:14 私たちの牛が子牛を産み、死ぬこともなく、出て行くこともなく、また、哀れな叫び声が私たちの町にありませんように。144:15 幸いなことよ。このようになる民は。幸いなことよ。主をおのれの神とするその民は。

ダビデは、これまで「私」と言って、自分が敵に対する戦いをしていましたが、彼はそこで受けた恵みを、「私たち」と言って、神の民の中に還元しています。主の民の中でその勝利を分かち合うことによって、民全体が神に祝福されていくことを祈っています。それで、主こそが神であることを民が知り、それで神に祝福された民となることができるのです。

どうでしょうか、戦いのための祈りについて見てきましたが、戦いというのは、孤独であることを学びました。誰かに相談して、それで解決するようなものではありません。何の解答もないようなところに、それでも主ご自身から目を離さずにいる時に、主が助けてくださるという経験をするのです。教会が、その個人的な神との出会いの肩代わりをすることはできないのです。教会にいれば祝福がくるわけではありません。祝福はあくまでも主ご自身が与えられ、その戦いの中にも主をお迎えすることによって与えられるのです。そして、その与えられた祝福を神の民の間で還元するのです。その時に、民全体が神から祝福されます。